

■ 書 評 ■

柴野昌山 [編]

『青少年・若者の自立支援—ユースワークによる学校・地域の再生—』

日本女子大学 田中 雅文

再帰的近代ともいわれる現代の社会では、準拠すべき確固たる社会の枠組が消滅し、人生の選択とその結果はすべて個人の責任に帰着することとなった。ベック (Beck, U.) やバウマン (Bauman, Z.) の主張する「個人化」の進行である。しかも、ギデنز (Giddens, A.) が「再帰的プロジェクトとしての自己」という言葉で表現するように、現代における自己は、目まぐるしく変わる諸制度や専門的な知識体系といった非人間的な抽象情報に照らして、再帰的に更新し続けられなければならない。このように、現代の人々は個人の責任で抽象情報をもとに常に自己を更新し続けるという、とても困難な課題を突きつけられている。とくに、これから人生を確立させる段階にある青少年・若者にとって、安定的なアイデンティティを形成して自立を成し遂げることは、至難の技といってよい。

本書は、青少年・若者の自立をめぐる上記のような問題に答えようとする意欲的な文献である。「まえがき」と序章及び第1章に提示されている本書の趣旨は、次のとおりである。

青少年・若者の自立を促す社会体制が崩れた現代社会では、自立の条件としてのシティズンシップ (市民的・制度的・社会的な権利と義務) を彼／彼女たちに

付与するために、人間の主体性を重視し社会と個人との新しい関係を模索するポスト近代型の「自己成長モデル」が求められる。そのためには、「ボランティアなグループ参加が人間を育てる」(7頁) という概念枠に基づき、個人の解放や協力的な相互作用などを促すグループワークを有効に活用する必要がある。このような方法論を中心とするユースワークこそが、青少年・若者の自己成長と自立を支えることができるのである。

以上のような前提に立ち、本書の第2章から第7章までは、多様な角度から自立支援の課題や現状の打開策を考察している。

第2章では、子どもと保護者の私生活化の弊害を指摘する。その是正のために、地域住民の学校支援によって「厳格な秩序と規範のもとでの集団生活」(51頁) を経験させ、学校という公的領域内で児童・生徒が自己コントロールできるよう促すべきだと主張する。

第3章では、新しい社会の形成者を育てる「未来志向」の学校教育を実現するために、学級を個人の解放とメンバー間の相互作用を重視する支持的集団に転換させること、そこでの教師はグループワーカーになるべきことを論じている。

第4章では、青少年施設におけるグル

ープワークの実際を描き、異質な他者を受け入れることの学び、「居ることの意味を問われない」ことの意義、意味ある他者としての大人の存在の意義などの点から、従来型でない新しい集団教育の可能性を論じている。

第5章では、個々の行為を「いじめ」行為として文脈づけるような空間の存在が問題だとし、社会全体を覆う情報メディア空間がバーチャルな共同体を形成し、それが「潜在的にいじめの『ネガティブな空間』となりつつある」(114頁)と警鐘を鳴らしている。

第6章では、「学校推薦」「一人一社主義」「事前選抜」などに基づく高校生の就職システムが労働市場の変化によって崩壊したことを示し、これからは「キャリア・アンカー」など個々の生徒の力量向上が重要だと論じている。

第7章では、男性優位の性差別構造を浮き彫りにする。その変革に向けてジェンダー平等な「パートナーシップ」の社会化モデルの構築が必要だとし、そこでのポイントは社会的・経済的自立とセクシュアリティにかかわる決定・選択の自律性だとしている。

本書の締めくくりにあたる第8章と第9章では、それぞれ青少年・若者の自立支援とユースワークをユニークに考察している。第8章は、ギデンズによる「生のポリティクス (life politics)」を發展させ、経済的自立と精神的自立を両立させる「ホリスティック (holistic) な自立」を提案し、そのために若者の自他への信頼感やコミュニケーション能力を醸成するユースワークを活用すべきと主張

する。第9章は、成長志向で自己開示過程を内包する相互ネットワークによる人間的自立の基礎づくりに加え、ボランティア活動を通じた公共的視点の醸成が重要とし、それらを促すユースワークの効果を論じている。

以上が本書の要旨である。ユースワークを通じた自己成長モデルの実現という本書の趣旨は、確固たる社会の枠組が消滅し、抽象的な情報に依存した自己形成に偏りがちな現代社会においては、的確な視点である。しかし、本書を通読して若干の物足りなさを感じる。

第1に、いくつかの章(例えば第2・5・6・7章)では、自己成長モデルやユースワークに焦点をあてた議論がない。編著であることの限界とはいえ、各問題領域におけるユースワークの可能性を論じることで、本書全体の議論が豊かになったと思われる。第2に、本書が自立の条件として強調するシティズンシップの獲得という点からみると、グループワークを基礎としながらも、社会・経済・政治などに係る問題について多様なコミュニケーションを可能とするような「公共圏」の形成が重要だと思われるが、そのあたりの議論があまりなされていない。

とはいうものの、本書は青少年・若者の自立をめぐる現代的な問題について、多様な角度から深い議論を展開している。編者が述べるように、たんなる若者論を超えて、各専門領域から導かれた「たしかかな理論枠組にもとづく現実分析と、変革への示唆」(iii頁)が小気味よく提示されている。実践と研究のどちらの立場からみても、さまざまな知見を提供して

くれる良書である。

世界思想社 2009年 9 月刊

◆ B 6 版 229頁 本体2,000円

■ 書 評 ■

北澤毅・古賀正義 [編]

『質的調査法を学ぶ人のために』

関西大学 山本 雄二

書名が示しているように、この本は後進の学習者にとって質的調査の指南書であるべく書かれたものである。では、どのような意味で指南書たりえているか。実はそれがむずかしいのである。この本は単なる技術的な教則本ではないし、研究の魅力的な実例を示して読者を仲間に誘い込もうとする誘惑本とも違う、ましてや執筆に当たった著者たちが各々の関心にそっててんでばらばらに書いたものを集めたという類のものではもちろんない。では、どういう本なのか。

編者のことばを借りてこの本の特徴を要約すれば、ひとまずは次のように言える。第一に「エスノメソドロジーや社会構築主義の理論を基盤にして対象を理解する方法」にこだわっている。理論といっても、現場や現象に外から当てはめるような枠組みがあるわけではない。「実践に埋め込まれた理論、ことばや振る舞いの実践を通してしか見えてこない理論を「いま・ここ」のデータから内在的に表出させる」(iii)、そのような意味での理論である。第二に「インタビューやエスノグラフィーという、調査される人々と直接コミュニケーションを交わすことで対象を理解する方法」にこだわってい

る。調査方法の限定であるといえればそれまでだが、人々の生の生活に接近すればするほど、話が一贯しているとはいいがたく、態度は恣意的であるし、同じ職場でも人によって言うことが違うといったケースにもごく当たり前のように出会う。当事者にはある出来事が何事もないかのように自然に受け止められていても、どうしてそれが自然に思えるのかわからない、なんていうこともざらにある。「調査される人々と直接コミュニケーションを交わすことで対象を理解する」とは、こうした訳のわからない錯綜地帯にあえて足を踏み入れるということである。そうして一緒に行動したり、振る舞いを観察したり、話を聞いたり、またそれらを記録したりしながら、錯綜した現場になんらかのルールを感じ取ろうとする。それが第一のこだわりでいう理論へと昇華するとすれば、それは幸運である。というのはそういうふうにはならないことも充分ありうるからである。頼りない話である。

頼りないことはしかし、この本ではネガティブな位置を与えられていないどころかむしろポジティブに評価される。はじめから自分にとってなじみのない世界